巻　頭　言

協働力は推進力なり

「協働」とは一つの目的を達成するためにメンバーがお互いに補完・協力すること（新明解国語辞典より）であり，「協働力」とは，人や物や社会を動かしたり，変化させる目に見えない働きのことと捉えられる。語源は英語の「Coproduction」に由来するとされ，日本語では「協働」と訳されている。

大学教員はどの分野であれ常に「教育力」，「研究力」を要求されるが，特に本学のような保健医療福祉系の分野ではそれに加え「実践力」が強く求められることになる。学生指導や実習施設での緊急な連絡調整や他領域との連携において的確で迅速な対応が必要な場面が多々出てくる。また委員会活動での役割の取り方や学内運営への関わり方，地域貢献の名のもとに求められる社会とのつながりなど幅広い面で共に協力する姿勢すなわち「協働力」が必要とされる。この「協働力」は「教育力」，「研究力」，「実践力」のすべてを推進する原動力であると考える。協働する上での課題は，組織的に協働力を高める経験がない，目標の共有ができていない，協働することによる成果が見えにくいなどがあげられるが，その根底にはコミュニケ―ション不足があることは否めない。

目標を共有し，成果を共有することによりお互いの共通認識がさらに高まり，良い人間関係の熟成が図られることになる。そのような土壌を育むためには我々はどう行動すればよいのだろうか？昨今個人評価のためのポイント制の導入は多くの大学や職場で実施されているが，そのような外発的要因とは別に，自己選択や自己決定ができる環境にあれば自己効力感が高くなりそれが自己の持ち味を活かし自己成長へとつながる，そういう関係性が築ければ自ら率先して働きたくなるのではないだろうか。大学教員の協働力を高める条件はそこにありそうだと考える。多くの個性がひしめき合う中で協働力の醸成は困難さを極めるであろうがそれを作り出せた組織はきっと強く生き残れるに違いない。そのような力をぜひ創りだしたいと思うがその前提として個々人がコミュニケーション力を高める必要性を痛感している。

学術雑誌に掲載される論文の投稿は大いに「研究力」の発信になるに違いないが，その根底として「協働力」を作り上げればより高い研究の推進力となるであろう。

県立広島大学　保健福祉学部
笠　置　恵　子